

怪人二十面相 江戸川乱歩

そのころ、^{とうきょうじゅう}東京^{まち}中の^{まち}町という^{いえ}町、^{いえ}家という^{いえ}家では、ふたり^{いじょう}以上の^{ひと}人が^{かお}顔を
あわせさえすれば、まるで^{てんき}お天気^{かいじん}のあいさつ^{にじゅうめんそう}でもするように、怪人「二十面相」
のうわさをしていました。

「^{にじゅうめんそう}二十面相」というのは、^{まいにちまいにち}毎日毎日、^{しんぶんきじ}新聞記事^ををにぎわしている、^{とうぞく}ふしぎな盗賊
の^なあだ名^{ぞく}です。その^{にじゅう}賊は^{かお}二十^ものまったく^{かお}ちがった顔^もを持っているといわれてい
ました。つまり、^{へんそう}変装^ががとびきり^{じょうず}じょうずな^ののです。

どんなに^{あか}明るい^{ばしょ}場所で、どんなに^{ちか}近^{すこ}よって^{へんそう}ながめても、少しも^{へんそう}変装とはわか
らない、まるで^{ひと}ちがった^み人に見えるのだそうです。^{ろうじん}老人にも^{わかもの}若者にも、^{ふごう}富豪に
も^{こじき}乞食にも、^{がくしゃ}学者にも^{ぶらいかん}無頼漢にも、いや、^{おんな}女にさえも、まったく^{ひと}その人にな
りきってしまうことができるといいます。

では、その^{ぞく}賊の^{とし}ほんとうの年^{かお}はいくつで、どんな顔^{かお}をしているのかというと、
それは、だれ^みひとり見た^{にじゅうしゆ}ことがありません。二十種^{かお}もの顔^もを持っているけれど、
そのうちの、どれが^{かお}ほんとうの顔^しなのだか、だれも知らない。いや、^{ぞくじしん}賊自身^でで
も、ほんとうの^{かお}顔を^{わす}わすれてしまっているのかもしれない。それほど、たえ
ず^{かお}ちがった顔^{すがた}、ちがった姿^{ひと}で、^{まえ}人の前^ににあらわれるのです。

竹取物語

いま むかし たけとり おきな もの のやま たけ と
今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろ
づのことに使ひけり。名をば、さぬきの造となむいひける。その竹の中に、
もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。
それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり。翁、言ふやう、
「我、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子になり給ふべき
人なめり。」とて、手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。妻の姫に預けて養は
す。うつくしきこと限りなし。いと幼ければ、籠に入れて養ふ。
たけとり おきな たけ と このこ みつ のち たけと ふし へだ
竹取の翁、竹を取るに、この子を見付けて後に竹取るに、節を隔てて、よご
とに金ある竹を見付くこと、重なりぬ。かくて、翁、やうやう豊かになり
ゆく。

怪人二十面相 江戸川乱歩

そのころ、東京中の町という町、家という家では、ふたり以上の人が顔をあわせさえすれば、まるでお天気のおいさつでもするように、怪人「二十面相」のうわさをしていました。

「二十面相」というのは、毎日毎日、新聞記事をにぎわしている、ふしぎな盗賊のあだ名です。その賊は二十のまったくちがった顔を持っているといわれていました。つまり、変装がとびきりじょうずなのです。

どんなに明るい場所で、どんなに近よってながめても、少しも変装とはわからない、まるでちがった人に見えるのだそうです。老人にも若者にも、富豪にも乞食にも、学者にも無頼漢にも、いや、女にさえも、まったくその人になりきってしまうことができるといいます。

では、その賊のほんとうの年はいくつで、どんな顔をしているのかというと、それは、だれひとり見たことがありません。二十種もの顔を持っているけれど、そのうちの、どれがほんとうの顔なのだか、だれも知らない。いや、賊自身でも、ほんとうの顔をわすれてしまっているのかもしれない。それほど、たえずちがった顔、ちがった姿で、人の前にあらわれるのです。

竹取物語

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてみたり。翁、言ふやう、「我、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子になり給ふべき人なめり。」とて、手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。妻の嫗に預けて養はず。うつくしきこと限りなし。いと幼ければ、籠に入れて養ふ。

竹取の翁、竹を取るに、この子を見付けて後に竹取るに、節を隔てて、よごと金ある竹を見付くること、重なりぬ。かくて、翁、やうやう豊かになりゆく。